

宇波川の魚類

不破光大・齋藤真里・稲村 修
魚津水族館 〒937-0857 富山県魚津市三ヶ1390

Freshwater Fishes from Unami-gawa River, Toyama Prefecture, Central Japan

Mitsuhiro Fuwa, Mari Saito and Osamu Inamura
Uozu Aquarium, 1390, Sanga, Uozu-shi, Toyama 937-0857, Japan

要約：宇波川は、富山県西部の氷見市北部を流れる二級河川である。今回、富山県生物学会による宇波川流域総合調査の一環として、魚類の生息現状を明らかにするために7つの地点で調査を行った結果、14科30種の魚類が確認された。これらを生活型別にみると、純淡水魚が3科7種、通し回遊魚が5科13種（ウグイを含む）、周縁魚が9科10種であった。宇波川は氷見市の河川の中では比較的河床勾配が大きく急流であるが、河口部は緩やかな汽水域となっていることから、純淡水魚が少なく通し回遊魚や周縁魚が多数確認された。『レッドデータブックとやま2012』（富山県、2012）に掲載されている希少淡水魚類では、「準絶滅危惧」のスナヤツメ南方種、ドジョウ、アユカケ、シロウオおよび「情報不足」のゴクラクハゼの4科5種が確認された。ゴクラクハゼは宇波川における過去の記録がない魚種で、近年、富山県内の河川下流域で生息域が広がってきている注目種である。一方、過去に記録があった「絶滅危惧Ⅰ類」のクロヨシノボリは確認できなかった。

はじめに

宇波川は、本川の長さ9.5 km、流域面積13.0 km²の小河川で、石川県鹿島町の石動山（564 m）の南斜面から流れ出し、県境を経て白川地域で五十谷川と合流し、谷底平野を経て宇波地域で海に入る。低地帯はほとんど通らない。戸津宮より上流域は河床勾配が大きいため谷幅の狭い峡谷をなし、所々に小滝のある急流になっている（氷見市史編さん委員会、1999）。宇波地区の集落の下流域からは比較的緩やかな流れとなっており、河口付近は汽水域となっている。

今回、富山県生物学会による宇波川流域総合調査の一環として、2021年5月6日、6月27日、9月26日に魚類調査を行った結果を報告する。

調査方法

調査は、投網と手ダモを用いた採集を行った。採集にあたり、富山県より特別採捕許可証（許可番号：第3-13号）を取得した。採集した魚類はその場で種を同定し、個体数の計数、全長測定および写真撮影を行った後に放流したが、種不明の幼魚は魚津水族館で飼育してから同定した。なお、川上僚介氏（NPO法人Bioクラブ）より情報提供のあった2021年3月21日のシロウオ、11月4日のサケの記録も調査結果に含めた。魚類の分類および学名・標準和名は、原則として『日本産魚類検索 全種の同定 第三版』（中坊、2013）を基本とし、ニシシマドジョウは中島ほか（2012）、トウヨシノボリは藤田（2019）、ゴクラクハゼは藤田（2015）に従った。調査時の水温を定点ごとに測定し、表1に記した。

表1 各調査地点の水温.

調査地点		定点1	定点2	定点3	補助調査地点I	定点4	補助調査地点II	定点5
		河口～脇方橋	中島橋	宇波川橋	五十谷川森出橋	中橋	大窪の溜め池	八代仙橋
水温 (°C)	5月6日	19.5		未測定				14.0
	6月27日	24.0	21.0	21.0	22.5	19.5		
	9月26日	18.5		17.0		17.0		
pH	9月26日	7.5		7.4		7.5		

※pHのデータはpH測定器の故障により9月26日のみ.

調査地点

調査は源流部を除いた宇波川本川と支流で行い、最下流部は河口付近で、最上流部は氷見市大窪地区の八代仙橋までとし、その間を調査区間とした(図1)。調査定点は5地点で、下流側を定点1とし、上流側を定点5として順に番号を付けた。また、氷見市白川地区で本川の右岸側から合流する支流の五十谷川での調査地点を補助地点I、氷見市大窪地区にある溜め池を補助地点IIとし、計7地点で調査を行った。位置関係は下流から順に、定点1・定点2・定点3・補助地点I・定点4・補助地点II・定点5となる。各地点の状況と出現魚類を以下に記す。なお、写真中の矢印は流れの方向を示している。

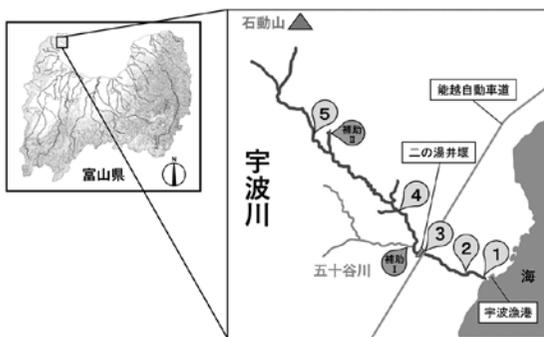


図1 宇波川調査地点図.

[定点1：脇方橋]

本地点(氷見市宇波)は調査区間の最下流部にあたり、橋より約50m下流で海へ流れ込む。調査は橋の約30m上流から河口までの区間で行った。兩岸はコンクリート護岸されており、流れは緩やかで、河床は砂泥底であった。5月6日は河口域の水深が浅く河床の一部が露出しており、河川水が左岸側から勢いよく海へと流入していたため汽水域は存在しなかった(写真1)。6月27日と9月26

日には河川水が川幅いっぱい流れ、流れが非常に緩やかな汽水域となっており、右岸側にある石積み護岸には海藻が生えていた。また、河口の左岸側にある宇波漁港側の岸壁にも海藻が繁茂していた。本地点では、投網と手ダモの採集を行った。今回の調査では、本地点で最も多くの魚類を確認した。



写真1 脇方橋下流(2021年5月6日).



写真2 脇方橋下流(2021年6月27日).

[定点2：中島橋]

氷見市宇波地区に位置し、河川は民家の間を緩やかに蛇行しながら流れている。調査は橋より約50 m上流から約100 m下流までの区間で行った。河川の両岸はコンクリート護岸されており、流れは比較的緩やかで、河床は平坦な礫底で浮石も見られたがヨシなどの植物は少なかった。全体的に水深は浅いが、橋の支柱部付近にやや深い窪みが形成されていた。本地点では、投網と手ダモの採集の他、11月4日に橋の上から目視調査も行った。



写真3 中島橋下流.

[定点3：宇波川橋]

本地点は氷見市宇波地区の能越自動車道に架かる橋の周辺で、橋直下から上流側にかけて海から最初の河川横断工作物である「1号魚道（二の湯井堰）」がある。堰の勾配は比較的緩やかで、右岸側には魚道が設置されていた（写真5）。調査は橋より約100 m上流から約30 m下流までの区間で行った。河川の両岸はコンクリート護岸されているが、所々にヨシなどの植物が繁茂していた。堰の直下はえぐれており水深がやや深い、下流側は浅くなっており流れのやや速い礫底で浮石も見られた。堰の上流側は水深が深く流れの緩やかな淵が約20 mあり、さらに上流側は浅く流れのやや速い礫底であった。本地点では投網と手ダモによる採集を行った。



写真4 宇波川橋上流（1号魚道）.



写真5 1号魚道（奥が魚道）.



写真6 1号魚道上流.

[補助地点I：五十谷川森出橋]

本地点は氷見市白川地区を流れる支流の五十谷川に架かる橋で、本川との合流点から約140 m上流にある。調査は橋から上流下流共に約50 mの区間で行った。河川の両岸は高いコンクリート護岸で、河川内には植物が繁茂していた。橋の上流側は流れが緩やかな砂礫底であった（写真7）。一

方、下流側は水深が浅く流れのやや速い礫底で、川幅の半分以上がヨシに埋め尽くされていた（写真8）。本地点では投網と手ダモによる採集を行った。



写真7 五十谷川森出橋上流.

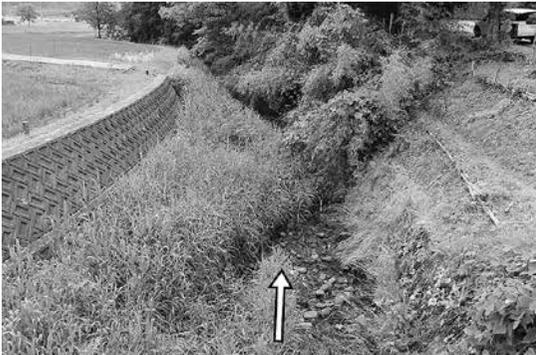


写真8 五十谷川森出橋下流.

[定点4：中橋]

氷見市戸津宮地区に位置し、周辺には民家や田畑が点在している。調査は橋より約100 m上流から約30 m下流にある魚道の設置された堰までの区間で行った。左岸側はコンクリート護岸が剥き出しになっており、右岸側は土砂が堆積して植物が繁茂していた。流れはやや速く、河床は砂礫底で浮石はあるものの礫は比較的小さなものが多かった。また、橋から約30 m上流の右岸側より細い用水路が合流しており、流れ込みの下にはハゼ科魚類などが多数溜まっていた。本地点では投網と手ダモによる採集を行った。

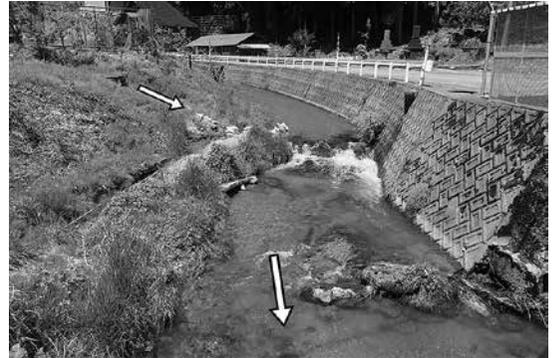


写真9 中橋上流.

[補助地点Ⅱ：大窪地区の溜め池]

本地点は氷見市大窪地区を流れる宇波川支流の上流にある溜め池である。溜め池の上流側は細流となっており、他にもいくつかの細流が流入して溜め池を形成していた。溜め池周辺は草木に覆われており、溜め池内はほぼ止水で、落ち葉が堆積した泥底であった。溜め池上流の細流は流れのやや速い砂礫底であった（写真11）。本地点では、手ダモによる採集を行った。



写真10 大窪地区の溜め池.

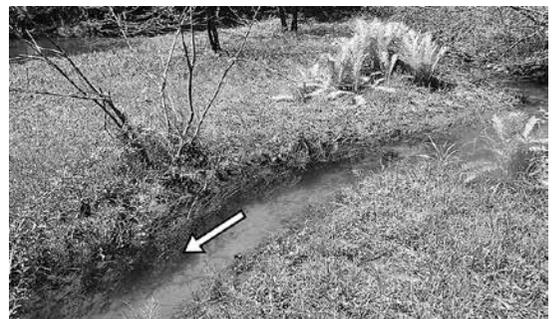


写真11 溜め池上流の細流.

[定点5：八代仙橋]

本地点は石川県との県境に隣接する氷見市大窪地区に位置し、今回の調査の最上流部にあたる。深い谷間を流れる細い流れで、橋の下流側に設置されている階段で本川まで降りていくことが可能であった。調査は橋から約20 m下流までの区間で行った。河川の両岸は木々などの植物に覆われており、流れは速く、河床は礫底で大きな転石や浮石も見られた。川幅は狭いが一様な急流ではなく、流れが比較的緩やかでやや深みのある淵も見られた。本地点では、手ダモによる採集を行った。



写真12 八代仙橋下流。

結 果

今回の調査では合計14科30種、502個体の魚類が確認された(表2)。これらを生活型別にみると純淡水魚は3科7種、通し回遊魚は5科13種(ウグイを含む)、周縁魚は9科10種であった。

出現種数が最も多かった地点は定点1で、10科15種であった。また、最も多くの地点で確認された魚類はゴクラクハゼで、定点1～3・補助地点I・定点4の5地点で確認された。以下に確認された魚類の状況や気付いた点を記す。

ヤツメウナギ科 Petromyzontidae

1. スナヤツメ南方種

Lethenteron sp.S. (sensu Yamazaki et al.)

定点3でのみ、5月6日に全長150 mmの成体が確認された。本地点では本種が好む砂泥底で採集を試みたが、6月27日と9月26日には確認できなかったことから生息数はかなり少ないと思われる。

る。本種は、生息環境の悪化により生息地、個体数共に減少しており、『レッドデータブックとやま2012』では「準絶滅危惧」に指定されている(富山県, 2012)。

コイ科 Cyprinidae

2. コイ

Cyprinus carpio Linnaeus

定点2でのみ、6月27日に体長約570 mm(尾鰭欠損)の死骸が確認された。従来コイと呼ばれていた中には、日本在来の野生型(マゴイ・ノゴイ)と大陸由来の飼育型(ヤマトゴイ)が知られ、飼育型は放流や逸出により全国の自然河川・湖沼のほか、人工的な溜め池やダム湖等に生息する(馬淵, 2018)。確認された個体は前頭部が張り出し体高も高い特徴から飼育型と考えられた。本種は比較的水深のある流れの緩い環境を好むが、今回の調査地点は河口付近の下流部以外は川幅が狭くやや流れのある地点が多く、水深も比較的浅い環境が多かったことから、本種の生息にはあまり適していないと思われる。

3. ギンブナ

Carassius sp.

補助地点Iでのみ、6月27日に全長120 mm・127 mmの2個体が確認された。本種は氷見市内の河川では比較的よく見かける一般種であるが、今回の調査では本川で確認されず、支流でのみの確認であった。

4. オイカワ

Opsariichthys platypus (Temminck et Schlegel)

定点3・補助地点Iで確認された。定点3では6月27日に全長110～160 mmの4個体と、9月26日に全長123 mmの1個体が確認され、補助地点Iでは6月27日に全長132 mm・155 mmの2個体が確認された。いずれも若魚や婚姻色を呈した成魚であり、幼魚は確認されなかった。本種は琵琶湖産のアユ種苗に混じってきた国内外来種と考えられている(南部, 1989)。現在、本河川ではアユ種苗の放流は行われていないが、過去に行われていた

表2 宇波川で確認された魚類と個体数.

No.	科名	和名	定点1	定点2	定点3	補助地点 I	定点4	補助地点 II	定点5							
			河口～脇方橋	中島橋	宇波川橋	五十谷川森出橋	中橋	大窪の溜め池	八代仙橋							
1	ヤツメウナギ科	スナヤツメ南方種														
2		コイ		1(死骸)												
3		ギンブナ				2										
4	コイ科	オイカワ			4	1	2									
5		タカハヤ					7	3	30	3						
6		ウグイ	1	21	8		24	17	9	1	4					
7	ドジョウ科	ドジョウ		4		10	4	3	7	1	2					
8		ニシシマドジョウ							3	2	1					
9	アユ科	アユ		1		11			8	6	5					
10	サケ科	サケ			1(死骸)											
11	ボラ科	ボラ		2	2											
12	ハオコゼ科	ハオコゼ			1											
13	タイ科	クロダイ		4	11											
14	メジナ科	メジナ		7												
15	カジカ科	アユカケ	1				2		1							
16		アサヒアナハゼ		1												
17	タウエガジ科	ベニツケギンボ		1	1											
18		ミミズハゼ			1											
19	ハゼ科	シロウオ	1													
20		マハゼ		2	15											
21		ヌマチチブ		1	1	2										
22		シマヨシノボリ			1		7	2	4	5	21					
23		トウヨシノボリ			3		2	3	3	1						
24		ゴクラクハゼ		1	1	1	43	13	3	5						
25		スミウキゴリ			20	7	6	4	1	8	36					
26		ウキゴリ				1		3								
27		シマウキゴリ				9	13	7		3						
28		アゴハゼ			1											
29	カレイ科	イシガレイ		1												
30	フグ科	ヒガンフグ														
	個体数	計	1	4	39	42	34	1	36	111	55	35	39	72	30	3
	科数	計		10		5		6		5		4		1		1
	種数	計		15		10		12		10		10		1		1

可能性がある。なお、今回の調査では本種以外の国内外来種は確認されなかった。

5. タカハヤ

Phoxinus oxycephalus jouyi (Jordan et Snyder)

定点4・補助地点II・定点5で確認された。補助地点IIでは、5月6日に溜め池に流れ込む細流で群れて泳いでいる姿を確認したが、溜め池内では確認されなかった。定点5では、5月6日に全長42mm・60mm・70mmの3個体が確認され、他にも数個体が群れて泳いでいる姿を目視確認した。本河川の上流域においては本種以外の魚類は確認されなかった。

6. ウグイ

Tribolodon hakonensis (Günther)

定点1・3・補助地点I・定点4の広域で確認された。定点1では6月27日に全長76～140mmの21個体、定点3では同日に全長100～240mmの24個体が投網によって採集された。今回の調査で確認した総個体数は85個体で、全魚種の中で最多であったが、若魚や成魚のみの確認で稚魚や幼魚は確認されなかった。本種は淡水型と降海型が知られるが、河口を含む下流域を中心に確認されたことから、ここでは通し回遊魚に含めた。

ドジョウ科 Cobitidae

7. ドジョウ

Misgurnus anguillicaudatus (Cantor)

定点2・3・補助地点I・定点4の広域で確認された。定点3と補助地点Iには、本種が好む流れの緩やかな淵があり、砂泥が溜まった場所で比較

的多数確認された。本種は、富山県内の平野部に広く生息していたが近年は減少しており、『レッドデータブックとやま2012』では「準絶滅危惧」に指定されている（富山県，2012）。

8. ニシシマドジョウ

Cobitis sp. BIWAE type B

補助地点 I ・ 定点4で確認された。補助地点 I では全長60 mm ・ 70 mm ・ 90 mmの3個体、定点4では全長68 mm ・ 70 mm ・ 100 mmの3個体が確認された。本種が好む砂礫底は所々にあったものの確認数は少なく、生息数は少ないと思われる。

アユ科 Plecoglossidae

9. アユ

Plecoglossus altivelis altivelis (Temminck et Schlegel)

定点2 ・ 3 ・ 補助地点 II ・ 定点4の広域で確認された。5月6日の調査時には本種は確認できなかったが、定点3の二の湯井堰の上流側と下流側において比較的新しい本種の食み跡が確認された。また、本河川では現在本種の放流は行われていないため、今回確認された個体は自然遡上した個体と考えられた。

サケ科 Salmonidae

10. サケ

Oncorhynchus keta (Walbaum)

本種は産卵のため海から川へと遡上する遡河回遊魚であり、調査時には確認できなかった。11月4日に目視調査を行ったところ、定点2の中島橋の上流側で本種の死骸が1個体のみ確認された。氷見市教育委員会の西尾正輝氏の住民への聞き取りによると、定点4まで遡上してくるとのことであった。

ボラ科 Mugilidae

11. ボラ

Mugil cephalus cephalus Linnaeus

定点1でのみ確認された。6月27日に全長255 mm ・ 270 mmの2個体、9月26日に全長133 mm ・ 138 mmの2個体が投網によって採集された。本種

は周縁魚であり、流れの緩い河川で河口域にも侵入することが知られている（瀬能，1989）。

ハオコゼ科 Tetrarogidae

12. ハオコゼ

Hypodytes rubripinnis (Temminck et Schlegel)

定点1でのみ、9月26日に全長43 mmの若魚が確認された。浅海性で沿岸のアマモ場 ・ 岩礁域に生息するが（中坊，1984b）、周辺の沿岸海域に生息している個体が河口の汽水域まで侵入してきたものと推察される。富山県沿岸海域では比較的普通に見られるが、富山県生物学会の小河川調査においては初確認である。

タイ科 Sparidae

13. クロダイ

Acanthopagrus schlegelii (Bleeker)

定点1でのみ、6月27日に全長95 ~ 115 mmの4個体、9月26日に全長65 ~ 115 mmの11個体が投網によって採集された。富山県沿岸海域や河口域では比較的普通に見られ、河川内に遡上することは知られているが、富山県生物学会の小河川調査においては初確認である。

メジナ科 Girellidae

14. メジナ

Girella punctata Gray

定点1でのみ、6月27日に全長20 ~ 36 mmの幼魚が7個体確認された。脇方橋下流右岸側の海藻が生えている汽水域で10個体前後が群れている姿を目視確認し、手ダモで採集した。富山県沿岸海域では一般種であるが、富山県生物学会の小河川調査においては初確認である。

カジカ科 Cottidae

15. アユカケ

Cottus kazika Jordan et Starks

定点1 ・ 3 ・ 補助地点 I で確認された。定点1では5月6日に全長27 mmの幼魚、定点3では6月27日に全長48 mm ・ 57 mmの若魚、補助地点 I では6月27日に全長59 mmの若魚が確認された。本種

は堰堤の設置による遡上の阻害や護岸化による河床の平坦化等の影響により減少しており、『レッドデータブックとやま2012』では「準絶滅危惧」に指定されている（富山県，2012）。

16. アサヒアナハゼ

Pseudoblennius cottoides (Richardson)

定点1でのみ、6月27日に全長86 mmの若魚が確認された。沿岸海域のアマモ場やガラモ場に生息することが知られており（中坊，1984a）、沿岸海域に生息している個体が河口の汽水域まで侵入してきたと推察される。富山県沿岸海域では比較的普通に見られるが、富山県生物学会の小河川調査においては初確認である。

タウエガジ科 Stichaeidae

17. ベニツケギンボ

Dictyosoma rubrimaculatum Yatsu, Yasuda et Taki

定点1でのみ、6月27日に全長45 mmの1個体、9月26日に全長65 mmの1個体が確認された。富山県沿岸海域では岩礁域や転石帯で普通に見られるが、今回の調査では脇方橋付近の河口域で手ダモによって採集された。沿岸海域に生息している個体が河口の汽水域まで侵入してきたと推察されるが、富山県生物学会の小河川調査においては初確認である。

ハゼ科 Gobiidae

18. ミミズハゼ

Luciogobius guttatus Gill

定点2でのみ、6月27日に全長67 mmの成魚が確認された。本種は河川の河口域や中流域の転石や礫底に生息するが、定点1の河口域は砂泥底で本種が隠れるような礫がなかったため確認できなかったと考えられる。

19. シロウオ

Leucopsarion petersii Hilgendorf

定点1でのみ、3月29日に1個体が確認された。本種は遡河回遊魚で1月から5月頃に河川に遡上して産卵する（川瀬，2015）。富山県生物学会の小

河川調査においては、氷見市余川川下流で確認されている（山崎ほか，2009）。本種は、産卵場所となる下流域や河口付近の川底の平坦化による土砂堆積や汚染によって、産卵場の減少や消失等で生息数が減少しており、『レッドデータブックとやま2012』では「準絶滅危惧」に指定されている（富山県，2012）。

20. マハゼ

Acanthogobius flavimanus (Temminck et Schlegel)

定点1でのみ、6月27日に全長190 mm・220 mmの2個体、9月26日に全長82～118 mmの15個体が確認された。本種は、河川の汽水域や内湾に生息し、秋頃には多数の未成魚が河口や河川下流域に侵入することが知られているが（辻，1989）、今回の調査では幼魚が確認されなかった。

21. スマチチブ

Tridentiger brevispinis Katsuyama, Arai et Nakamura

定点1・2で確認された。定点1では全長64 mm・70 mmの2個体、定点2では全長82 mm・85 mmの2個体が確認された。富山県内の河川では中流から河口域に生息する。今回の調査では下流域の流れが緩やかな場所でのみ確認され、個体数は少なかった。

22. シマヨシノボリ

Rhinogobius nagoyae Jordan et Seale

定点2～4で確認された。定点4では9月26日に全長55～86 mmの21個体が確認された。本種は、富山県内の河川では主に中・下流域に生息しているが、本河川は下流域の河口付近が砂泥底であったため、定点1は本種が好むような環境ではなかったことから確認できなかったと考えられる。

23. トウヨシノボリ

Rhinogobius sp. OR

定点2・3・補助地点I・定点4の広域で確認された。今回の調査では同じヨシノボリ類のシマヨシノボリやゴクラクハゼとほぼ同所的に確認されたが、他のヨシノボリ類に比べると個体数は少な

く、生息数自体が少ない印象であった。今回採集された個体は全長が50～88 mmで、成魚は大型で雄の第一背鱗は烏帽子型に伸びており、尾鰭基底には橙色斑があったことから、藤田（2019）に従いトウヨシノボリとした。

24. ゴクラクハゼ

Rhinogobius similis Gill

定点1～3・補助地点I・定点4の5地点と、今回の調査において最も広域で確認された。定点1では5月6日に全長35 mmの幼魚のみの確認であったが、定点3では6月27日に全長60～100 mmの43個体、9月26日に全長72～100 mmの13個体が確認された。本種は本河川の過去の記録には記載がなかった種であるが、今回の調査では多数確認された。本種は富山県内において過去の記録が少ないことから、『レッドデータブックとやま2012』では「情報不足」に位置付けられている（富山県、2012）。

25. スミウキゴリ

Gymnogobius petschiliensis (Rendahl)

定点2・3・補助地点I・定点4の広域で確認された。定点2では6月27日に全長27～81 mmの20個体が確認され、全長30 mm前後の幼魚は水族館に持ち帰り飼育して同定した。また、定点4では9月26日に全長53～115 mmの36個体と多数確認されており、今回の調査ではウキゴリ類3種（スミウキゴリ・ウキゴリ・シマウキゴリ）の中で本種が最も多く確認された。一般的にウキゴリ類3種が混生する河川においては本種が下流側に偏る傾向がみられるが（武内、2015）、富山県氷見市内の河川においては余川川（山崎ほか、2009）と泉川（不破ほか、2018）においても本種が3種の中で最も上流側に分布していた。今回の調査においても本種が他のウキゴリ類に比べて上流側に生息する傾向がみられた。

26. ウキゴリ

Gymnogobius urotaenia (Hilgendorf)

定点3でのみ、5月6日に全長75 mmの1個体、

9月26日に全長80～136 mmの3個体が確認された。本種は流れの緩い環境を好んで生息するが、定点3には瀬と淵が形成されて本種が好む環境があったものの個体数は少なく、生息域もウキゴリ類3種の中で最も狭かった。

27. シマウキゴリ

Gymnogobius opperiens Stevenson

定点3・4で確認された。定点3ではウキゴリ類3種の中で最も多く確認されたが、定点4では6月27日に全長82～92 mmの3個体のみでスミウキゴリに比べて少なく、9月26日は1個体も確認できなかった。このことから、本種は定点3付近が主な生息域と考えられる。

28. アゴハゼ

Chaenogobius annularis Gill

定点1でのみ、9月26日に全長45 mmの若魚が確認された。本種は潮溜まりなどに生息し、汽水域に侵入することもあるが（萩原、1997）、今回の調査でも河口から約50 m上流の脇方橋の下で採集された。富山県沿岸海域では一般種であるが、富山県生物学会の小河川調査においては初確認である。

カレイ科 Pleuronectidae

29. イシガレイ

Kareius bicoloratus (Basilewsky)

定点1でのみ、6月27日に全長110 mmの幼魚が確認された。本種は海産魚であり、沿岸浅所から水深100 mまでの砂泥底に生息するが、隣接した淡水域にも入ることが知られている（坂本、1997）。富山県生物学会の小河川調査においては初確認である。

フグ科 Tetraodontidae

30. ヒガンフグ

Takifugu pardalis (Temminck et Schlegel)

定点1でのみ、9月26日に全長約120 mm・150 mmの2個体が脇方橋の上流側で水面付近を泳いでいるのを目視確認した。本種は浅海の岩礁域に

生息するが、今回の調査では海から約70 m上流の水面付近の淡水域で確認された。富山県内の河川内では稀で、富山県生物学会の小河川調査においては初確認である。

まとめ

今回の調査では、14科30種の魚類が確認された。純淡水魚は3科7種が確認され、氷見市の他河川（仏生寺川7科15種、泉川6科10種）（不破ほか、2013、2018）と比べるとやや少ない。宇波川は河床勾配が大きく、谷幅の狭い峡谷を流れる急流な所がほとんどであるため、流れの緩やかな所を好む純淡水魚が少なかったと推測できる。また、富山県東部の河川の場合、上流域ではイワナ・ヤマメが生息しているが、宇波川では確認できなかった。

通し回遊魚はアユをはじめアユカケ、ハゼ科魚類など5科13種が確認された。定点3には海から最初の河川横断工作物である1号魚道（二の湯井堰）があるが、これより上流の補助地点Iと定点4でも多数確認された。氷見市史（氷見市史編纂委員会、1999）では、本河川が氷見市で最もアユの多い河川で、自然遡上の上限は河口から約1.5 km上流にある落差約2 mの二の湯井堰までとある。しかし、その後の魚道の設置などの形状改善により、アユやサケのほか、遊泳力の弱いアユカケの遡上も確認された。

周縁魚は9科10種と多数確認されており、これは今まで行った富山県生物学会の小河川調査（計15小河川）の中で最多である。なかでもハオコゼ、メジナ、アサヒアナハゼ、ベニツケギンポ、イシガレイ、ヒガンフグの6種は、富山県生物学会の小河川調査においては初確認であった。生態から考えるとこれら6種は海水魚といえるが、ここでは周縁魚に含めた。周縁魚が多数確認された要因として、河口域が流れの緩やかな汽水域であったことに加え、河口域に海藻が繁茂しており、生息に適した環境があったことが挙げられる。氷見市の泉川では周縁魚が5科7種で（不破ほか、2018）、本河川よりやや少ない。泉川河口域周辺の海域は砂浜であり、岩礁域を好む周縁魚が少ない

ことが理由として考えられる。

氷見市の河川は国内外の外来種の生息が多数確認されているが、国内外来種はオイカワのみであり、本河川が流れの緩い環境が少ないことから外来種の定着が少ないと推測された。

次に、今回の調査で確認された『レッドデータブックとやま2012』に掲載されている希少淡水魚類について、「準絶滅危惧」ではスナヤツメ南方種、ドジョウ、アユカケ、シロウオ、「情報不足」はゴクラクハゼの計4科5種であった。なかでも我々が注目しているゴクラクハゼは、宇波川の過去の記録が記載された南部（1989）の目録および氷見市史（氷見市史編纂委員会、1999）には記録がないが、今回の調査では最も広域で確認されており個体数も多かった。富山県における本種の記録は、古くは山下（1937）の目録および小林ら（1964）の庄川からの簡単な報告と、南部（1984）の神通川の富山大橋と神通橋の間で採集された記録（採集年月日：1982年9月27日）があるくらいであったが、2008年に早月川と片貝川の河口域で相次いで確認されている（稲村・不破、2009）。その後、富山県生物学会の小河川調査や魚津水族館の調査において県内各地で採集しており、現在では全県的に下流域を中心に広がりをみせている（表3）。今回の調査では中・下流域において高密度で確認されたことから、氷見市内の各河川におけるゴクラクハゼの分布状況や同所的に生息する他魚種への影響等、今後も継続して注視していきたい注目種である。一方で、南部（1989）に記録のある「絶滅危惧I類」のクロヨシノボリは確認できなかった。しかし、2016年3月には氷見市北部の別河川で13年ぶりに発見され氷見ラボ水族館（氷見市惣領）で展示されており（2016年5月17日北陸中日新聞）、その後の魚津水族館の調査においても同河川で2016年7月19日（不破、未発表）と2021年3月11日（齋藤、未発表）に本種を確認している。このことから、生息数は少ないが継続して確認できているため、同じく氷見市北部にある宇波川においても生息している可能性はあると考えられるが、今回の調査では確認できなかった。

表3 富山県生物学会の小河川調査と魚津水族館の調査で確認したゴクラクハゼの記録.

採集年月日	採集地名	河川名	採集者
20080803	魚津市三ヶ	早月川 河口	稲村 修・不破光大
20080909	魚津市寿町	片貝川 河口	稲村 修・不破光大
20100922	立山町泉	白岩川と栃津川合流点	※福田ほか(2010)より引用
20110911	魚津市寿町	片貝川と布施川合流点	不破光大
20130913	高岡市三女子	庄川	不破光大
20131123	氷見市深原	仏生寺川	不破光大・齋藤真里
20140708	射水市八島	射水市立東明小学校付近の用水路	不破光大
20140913	射水市枇杷首	庄川	泉 拓朗
20150308	高岡市戸出大清水	庄川 中田橋	泉 拓朗
20160719	氷見市姿	出土川	稲村 修・不破光大・齋藤真里・泉 拓朗
20161019	滑川市堀江	上市川 交観橋	不破光大・齋藤真里・稲村 修
20180903	富山市湊入船町	富岩運河 がめ川合流点	不破光大・齋藤真里
20180920	朝日町赤川	小川	不破光大・齋藤真里・西馬和沙
20191107	黒部市轟下	仁助川	齋藤真里
20200323	富山市中野新	常願寺川と半俵川合流点	不破光大
20210311	富山市四方西岩瀬	日本海石油横の用水路	齋藤真里・泉 拓朗

謝 辞

今回の調査にあたり、採集にご協力いただいた氷見市教育委員会の西尾正輝氏、NPO法人Bioクラブの川上僚介氏、氷見市自然保護員の釜谷将太氏、富山大学学生の家敷陽氏に厚くお礼申し上げます。また、氷見市自然保護員会長の関一朗氏をはじめ戸津宮公民館の皆様より氷見市戸津宮地区で淡水魚類に使用される方言（地方名）についてもご教授いただいた（表4）。この場を借りて感謝申し上げます。

引用文献

- 藤田朝彦. 2015. ゴクラクハゼ. 解説. 細谷和海（編・監修）. 山溪ハンディ図鑑15 日本の淡水魚. pp.422-423. 山と溪谷社, 東京.
- 藤田朝彦. 2019. トウヨシノボリ. 解説. 細谷和海（編・監修）. 山溪ハンディ図鑑15 増補改訂 日本の淡水魚. pp.474-476. 山と溪谷社, 東京.
- 福田 保・美馬純一・山崎裕治・伊藤千陽・波佐谷紘子・安達文成・堺 康治・南部久男. 2010. 栃津川の魚類. 富山の生物. 49: 29-32.
- 不破光大・稲村 修・伊串祐紀・草間 啓・西尾正輝. 2013. 仏生寺川の魚類. 富山の生物. 52: 35-44.
- 不破光大・齋藤真里・稲村 修. 2018. 泉川の魚類. 富山の生物. 57: 29-39.
- 萩原清司. 1997. アゴハゼ. 解説. 岡村 収・尼

表4 戸津宮地区で淡水魚類に使われる方言.

標準和名	地方名
タナゴ (ヤリタナゴ)	ビンボウブナ
ヨシノボリ類 小型	グズ
ヨシノボリ類 大型	サンカク
タカハヤ	アマゴ
ドブガイ類	タンガイ

- 岡邦夫（編・監修）. 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. pp.616-617. 山と溪谷社, 東京.
- 氷見市史編さん委員会（編）. 1999. 氷見市史9 資料編七 自然環境. 506pp. 氷見市, 富山.
- 稲村 修・不破光大. 2009. 2008年片貝川水棲生物調査. 魚津水族博物館年報. 19: 36-45.
- 川瀬成吾. 2015. シロウオ. 解説. 細谷和海（編・監修）. 山溪ハンディ図鑑15 日本の淡水魚. p.464. 山と溪谷社, 東京.
- 小林久雄・佐藤久三・殿山美喜夫. 1964. 庄川の淡水魚. 中部日本自然科学調査団 報告第6報: 1-2.
- 馬淵浩司. 2018. コイ. 解説. 中坊徹次（編・監修）. 小学館の図鑑Z 日本魚類館. pp.88-89. 株式会社小学館, 東京.
- 中坊徹次. 1984a. アサヒアナハゼ. 解説. 益田一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫（編者）. 日本産魚類大図鑑《解説》. p.315. 東海大学出版会, 東京.
- 中坊徹次. 1984b. ハオコゼ. 解説. 益田一・尼

- 岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫（編者）. 日本産魚類大図鑑《解説》. p.305. 東海大学出版, 東京.
- 中坊徹次（編）. 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 2431pp. 東海大学出版会, 神奈川.
- 中島 淳・洲澤 讓・清水孝昭・斉藤憲治. 2012. 日本産シマドジョウ属魚類の標準和名の提唱. 魚類学雑誌. 59 : 86-95.
- 南部久男. 1984. 富山県の淡水魚3種（カンキョウカジカ, カジカ, ゴクラクハゼ）の記録. 富山市科学文化センター研究報告. 6 : 95-96.
- 南部久男（編著）. 1989. 富山市科学文化センター収蔵資料目録 第3号 田中晋淡水魚コレクション - 日本産トゲウオ科魚類・富山県産淡水魚・富山湾産ハゼ科魚類 -. 123pp. 富山市科学文化センター, 富山.
- 坂本一男. 1997. イシガレイ. 解説. 岡村 収・尼岡邦夫（編・監修）. 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. pp.674-675. 山と溪谷社, 東京.
- 瀬能 宏. 1989. ボラ. 解説. 川那部宏哉・水野信彦（編・監修）. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚. pp.458-460. 山と溪谷社, 東京.
- 武内啓明. 2015. スミウキゴリ. 解説. 細谷和海（編・監修）. 山溪ハンディ図鑑15 日本の淡水魚. pp.406-407. 山と溪谷社, 東京.
- 富山県. 2012. 絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブックとやま2012－. pp.88-106. 富山県生活環境文化部自然保護課, 富山.
- 辻 幸一. 1989. マハゼ. 解説. 川那部宏哉・水野信彦（編・監修）. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚. p.624. 山と溪谷社, 東京.
- 山下博三. 1937. 富山県の淡水魚略記. 富山高校博物同好会会誌. 3 : 42-52.
- 山崎裕治・山野歩美・伊藤千陽・中村友美. 2009. 富山県氷見地方を流れる余川川の淡水魚類相および河川改修の影響. 富山の生物. 48 : 37-43.